

三、学園運営の寛と厳

宿直・運転免許・手作り弁当……

神 原 俊 治

昭和四十八年二月初旬、父から「すぐに帰ってこい」という一本の電話が四谷寮にあった。その時期卒論を提出し終えた私は、約二か月の空白期間を満喫しようとしていた矢先の電話であった。取る物もとりにあえず帰ってみると「学長から電話があつて、卒論を提出したのであれば用はないはずだから可部に来させるように」と言われたということであつた。準備も無しで可部にやってきたのは、ちょうど一次入試が終わつた頃であつたと記憶している

（当時の入学試験は一次、二次と二回あった）。到着したその日から夜は宿直（文学部棟一階）、昼間は教務課での入試受付のアルバイト生活が始まった。宿直という話は聞かされていなかったが『泊まるところは心配しなくて良い』ということはこういうことだったのかと理解したが後の祭であった。寝具はまだ四谷に置いたままであったので、しばらくの間学長に用意していただいた布団を使用した。

宿直をして驚いたのは、学長が他の誰よりも学校にいる時間が一番長いということだった。昼間は人の出入りが多くて、落ちついた時間がとれるのは皆が帰った後になるので必然的にこの時間になるのだと言われ、公文書に目を通したり、職員の給与から業者への支払などの計算までされ、午後十時以前に学長室の照明が消えることはほとんどなかった。学校を最後に出られるということであつたからかも知れないが、必ず一声「帰るよ」と声をかけて下さつた。これは宿直をしていてたいへんありがたかつた。なぜなら、この年の五月、当時はまだ中島（現在安佐市民病院敷地）にあつた高等学校の宿直をするため新川橋袂の宿直用の宿舎に移つたのであるが、高校の職員室の照明がなかなか消えないので、やきもきしながら就寝前の見回りまで待つて職員室を覗いたら空っぽであつたという経験を何度も味わつたからである。

細やかな心遣いということではこのようなこともあつた。私は学生時代、車には全く興味が無かつたので免許は持っていなかった。しかし着任早々「免許は持ってるか」と尋ねられ「持っていない」と答えると「ぜひ取りに行くように」と勧められた。昼は勤務、夜は宿直で時間がなかったがその後何度か言われたので、近くの自動車学校に通うことになり、その年の十二月に免許を取得した。取得の報告をするたびに、市内は言うに及ばず呉市、三次市、遠くは浜田市へと若葉マークを付けて走つた。その後は公的な場合でも、私的な場合でもちよつとした遠出

三、学園運営の寛と厳

の際にはお呼びがかかった。そのような時には、必ずお手製の弁当をいただいた。炊き込みご飯あり、おむすびあり、巻き寿司ありでバラエティーに富んでいた。また、私にとって初めての司書講習（昭和四十八年）が始まった直後、それまでの疲労と風邪で一週間ほど寝込んでしまった。その時お粥、雑炊、煮込み素麺など宿直室の炊事場でつくっていただいた。忘れることのできないことである。

このようなことを思い出しながら、ふと、二十年も側にいながら私は何を身につけたのだろうかと考える。何かを得ているはずであるが、まとまらない。雲の上から「性根を入れてやりんさい」とお叱りを受けそうである。ただ「何事に対しても真剣に全力でぶつかること」を念頭において頑張りたいと思います。

合掌